対談

アニメが持つ可能性を生かして

── アニメーターの原点

針谷市長（以下、市長）　古河大使として日頃からふるさとのPR活動をしていただきありがとうございます。早速ですが、子どもの頃はどんなことに夢中でしたか。

浅野恭司さん（以下、浅野）　小さい頃からたくさん絵を描いていましたね。幼稚園の道具箱に『機動戦士ガンダム』の絵を描いていた記憶があります。兄の影響もあり、漫画やアニメが大好きでテレビにくぎ付けでした。テレビの特番で『ガンダム』や『宇宙戦艦ヤマト』などの映像が流れると、今でも胸が熱くなります。

市長　私は『巨人の星』や『赤き血のイレブン』など、いわゆるスポ根アニメに夢中でしたね。主人公の血のにじむような特訓やライバルとの死闘、困難に立ち向かっていく姿は、大人になっても鮮明に覚えています。

　アニメーターの道に進もうと決めたきっかけを教えてください。

浅野　中学、高校と進むにつれてアニメの魅力に引き込まれ、友人と一緒にアニメ関連のイベントにもよく参加するようになりました。もともと絵を描くことが好きだったので、アニメーターを目指してみようと専門学校への進学を決めました。

市長　ご両親の反応などはいかがでしたか。

浅野　好きなことをやるならと反対はされませんでした。素直に感謝しています。正月に実家に帰省した際、自分が関わった作品を家族で見る機会があったのですが、エンドロールに自分の名前が流れた時はみんな大喜びでした。

市長　まさにこれまでの努力が報われた瞬間ですね。

── 『SPY×FAMILY』を通じて

市長　アニメーターとは具体的にどのような仕事なのですか。

浅野　アニメーションに使うキャラクターや背景となる絵を一枚一枚描いていく仕事です。漫画であれば1ページの中に静止画で表現しますが、アニメーションは静止画を連続で映し出していきます。

市長　キャラクターに命を吹き込む仕事とは、まさに職人ですね。

　WIT STUDIOでは『進撃の巨人』や『バブル』など多くのヒット作品を生み出してきましたが、昨年設立10周年を迎え、取締役としての現在の思いをお聞かせください。

浅野　当初、何か面白いことをしたいという思いで、私を含めた仲間3人で設立しました。ここまで継続して制作に携わってこられたのは、作品を見てくださるファンの応援があったからこそです。これからも人の心を揺さぶるような魅力的な作品を制作していきたいと思っています。

市長　昨年4月に放送が開始された『SPY×FAMILY』では総作画監督を務めていらっしゃいますね。今、最も勢いがあるアニメと言っても過言ではないと思います。制作に携わってみていかがですか。

浅野　いずれアニメ化される作品だと思っていました。制作会社のコンペに参加したところ、複数の業者の中から選ばれたと聞いた時はうれしかったです。もともと原作が大人気の漫画でしたから、原作ファンの期待を裏切らない作品に仕上げるよう努めています。プレッシャーが大きい分、やりがいも感じますね。

市長　原作者の遠藤達哉さんも古河市出身です。大人気のアニメに市出身者が二人も関わっているなんて奇跡的なことではないでしょうか。

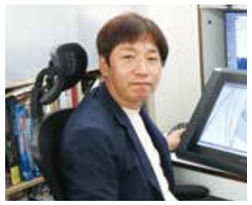
浅野　遠藤さんとは一度お会いしたことがありますが、ふるさとで同じ時間、同じ空間を共有していたと思うと不思議な気持ちです。何か運命的なものを感じてしまいます。

市長　広報古河（令和3年5月号）の表紙に『SPY×FAMILY』を使用したことがありましたが、市内外からたくさんの反響がありました。漫画やアニメファンの力は計り知れないものがありますからね。いわゆる「聖地巡礼」のような、アニメを活用したまちづくりに取り組んでいる自治体もあります。

浅野　私も古河市で原画展やフェスを開催しましたが、市内だけでなく遠方からも多くのファンにお越しいただきました。コロナの影響もあってここ数年はオンラインでの配信ですが、また地元で開催したいですね。古河大使として少しでも地元を盛り上げられないかと常々考えているところです。

　今回『SPY×FAMILY』という

プロフィール



浅野 恭司　あさの・きょうじ

西牛谷小学校、総和北中学校、総和高等学校、代々木アニメーション学院を卒業後、Production I.Gに入社。2012年にWIT STUDIOを設立。テレビアニメ『PSYCHO-PASS サイコパス』『進撃の巨人』『SPY×FAMILY』で総作画監督などを務めるほか、古河市ゆかりのキャラクターの制作にも携わる

“市民の皆さんがワクワクするようなことをしたいですね”

by 浅野 恭司さん